

昭和二十年五月二十五日夜の東京大空襲で虎ノ門にあった本会の図書室が焼失した際、そこに寄託されていた木暮理太郎氏の蔵書が、借しくもすべて灰燼にされたことは、いまでもご承知の会員がおられると思う。それは「木暮文庫」として将来本会の蔵書に加えられる予定でもあったと推察されるのだが、その内容については、焼失されたためこんにちでは知ることができない。

最近私は古いものを整理する必要にせまられ、片付けていたところ、嘗て田辺主計氏から譲り受けた古いもののなかに幻の「木暮文庫目録」なるものを発見した。よって記録にとどめておくべきと思ひ、岡沢君へ送ることとした。

「木暮文庫」のこと

望月達夫



1986年(昭和61年)
8月号(No. 494)

社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価一部 150 円

目次

- 「木暮文庫」のこと 望月達夫……………(1)
第23回「この一本展」 図書委員会……………(2)
海外の山……………(2)
「南チロルで行なわれたサミット」
「ポーランド山岳会歓迎富士登山」
「日米交換登山アメリカの報告書から(中)」
東西南北……………(5)
「三水会現地集會」「会員通信」「広島在住会員懇親会」「山岳博物館を考ふる会から」
報告……………(7)
福島支部、熊本支部、北海道支部、信濃支部、秋田支部、医療委員会、婦人懇談会
会務報告・ルーム日誌・会員移動……………(9)
会員名簿(1985)の正誤表(2)……………(10)
お知らせ……………(11)
「ビアパーティ」「会員懇談会」「虎毛山山行」「図書交換会」「近代絵画にみる日本の山・名作展」「会告」

▶日本山岳会事務取扱時間

月、火、木、土曜 10時～20時
水、金曜 13時～20時

日曜・祭日は休み

▶図書室開室時間

日曜・祭日・月曜を除く毎日
13時～20時

R. Kogure's Memorial Library

Nihon Sangakukai

- Conway, W.N. : Climbing in the Himalaya Maps and Scientific Records
Havell, E.B. : The Himalaya in Indian Art
De Fillippi, Fillippo : La Spedizione Nel Karakoram e Nell' Imaia Occidental 1909
Freshfield, D.W. : The Exploration of the Caucasus, Vol. 1 & 2
Dyhrenfurth, G.O. : Deamon Himalaya... Bericht der Internationalen Karakoram-Expedition, 1934
De Fillippi, Fillippo : Himalaya Caracoram e Turchestan Cinese (1913-1914)
Con Capitori Aggiumtvi di Giotto Dainelli e Spranger
Walton, W.H. Murray : Scrambles in Japan and Formosa
Enock, C.R. : The Andes and the Amazon Life and Travel in Peru
Sherring, C.A. : Western Tibet and the British Borderland
Teichman, E. : Journey to Turkistan
A Lady Pioneer : The Indian Alps and How We Crossed Them
Heim, A. : Minya Gongkar
Bauer, P. : Kampf um den Himalaya
Whymper, E. : The Ascent of the Matterhorn
Burdall, R.L. and Arthur B. Emmons : Men against the Clouds
Tilman, H.W. : Snow on the Equator
Bauer, P. : Himalayan Campaign the Attack on Kangchenjunga
Conway, M. : Climbing and Exploration in the Bolivian Andes
Weston, W. : The Playground of the Far East
Collie, N. : Climbing on the Himalaya and other Mountain Ranges
Merzbacher, G. : The Central Tian-Shan Mountains
Romm, M. : The Ascent of Mt. Stalin
Wympier, E.L. : Travels amongst the Great Andes of the Equator
Hooker, J.D. : Himarayan Journals, Or notes of a Naturalist
Ross, M. : A Climber in NeueZealand
Shipton, E.E. : Nanda Devi

- Bauer, P. : Im Kampf um den Himalaja
Mummery, A.E. : My Climbs in the Alps and Caucasus
The Earl of Ranaldshay : Lands of the Thunderbolt
: The Himalayan Journal Vol. 1 No. 1 (April 1929)
The Himalayan Journal Vol. 2
The Alpine Journal Nos. 234, 236, 237, 238.
Tyndall : Glaciers of the Alps and Mountaineering in 1861

(以下次号)

お知らせ電話

234
六六五九

が多過ぎてさうもならず、引取って二ケの大箱詰となし、何時でも疎開出来るやうな態勢に置いたのであったが、遂に動かすことが出来ず、会員諸氏に未披露のまま一塊の灰としてしまった

第二十三回

この一本展

図書委員会

第二十三回『この一本展』は去る二月十五日(土)本会ルーム図書室で開かれた。今回はテーマを同時開催した「山岳図書を語る夕べ」の「山岳写真をめぐる」(内容は「山」49号参照)に合わせ、日本で出版された山岳写真集特集とし、明治時代に刊行された初期のものから昭和四十年代前半までに出版された写真集のうち主なものを展示することにした。

わが国の初期の山岳写真集としては、まず「高山深谷」と「山岳美観」の書名があげられよう。このうち今回は「高山深谷」の第一輯から第十輯までの全揃いが展示された。この全揃いを一冊一冊実際に手にして、じっくりと内容を観る機会にめぐらしたものである。今回はこの点だけでも多くの参加者に満足して頂けたものと確信している。

こうして時代を追って山岳写真集を一堂に集め並べてみると、本格的な写真集の出現が意外に新しいものであることに気づく。それ

事は、返すがえすも残念であった。今更返らぬ事作ら近く本誌上に同文庫目次を発表して謝意を表すると共に、図書室再建の参考にする予定である」

は前記二冊以外のものがほとんど昭和に入ってから出たものであり、専門家に依るものは昭和十五年刊の岡田紅陽の「富士山」が初めてであろうから、それから五十年にもなっていない。大判の立派な写真集が次々と刊行されるようになったのは、昭和三十三年代後半からである。

当日展示した写真集は次の通りである。(書名、著編者名、発行年月、発行所の順)。なお、このリスト以外に、小野幸氏より同氏宛高野鷹蔵さんの「高山深谷」の製作についての手紙(コピー)が出品されたことと、「山岳図書を語る夕べ」の講演者、白旗史朗氏の写真集を十数点参考展示したことを付記して置く。

1、富士山 エチ・ジー・ポティン グ 明治38年10月刊 小川一眞出版部

2、高山深谷―第一輯―第八輯 高野鷹蔵 明治43年・大正6年刊 日本山岳会

3、日本アルプス写真集 山田

海外の山

南チロルで行なわれた

サミット

ヒマラヤで一体、自分たちはどんな山登りをめざしているのか。ヨーロッパのトップ・クライマー七人が互いに齒に衣着せずに語りあった「*Soumet de Juvai* (ジュヴァル・サミット)」の全内容が、「岩と雪」誌に上下二回(「下」は九月一日発行)に分けて掲載されている。フランスの「ヴェルティカル」誌(八五年五月創刊、年五回発行)が昨年十月に企画したこのサミット、南チロルのジュヴァルにあるメスナーの城で行なわれたことからこのような命名となったが、最近まれに見る刺激にあふれた座談会記録だ。

参加者は、八千峰十四座のうちローツェとマカルを除く十二座に登っているメスナー、エベレスト南西壁の初登攀に成功したダグ・スコット、ダウラギリ東壁はじめ一連の八千峰アルパイン・スタイルで知られるポーランドのクルティカ、カンチエンジュンガ・ソロなどのフランスのベガン、エベレストとナンガ・パルバートに登った女性、ポーランドのルトキエヴィツ、昨年ガツシャブル1、2峰、K2の三座に登ったフランスのエスコフィエ、一シーズンに八千峰三座登頂を達成したスイスのロレタン七人。

二日間、英語にして二万語に及んだやりとりについて、掲載誌を見て頂くしかないが、この中で印象的なことがいくつかある。まず、メスナーの衰えだ。

「ぼくは、いまヒマラヤ・クライミングに對する興味を失ないつつあるんだ」と、四十一歳になった「超人」が、冒頭に発言したために、「サミット」は、終始メスナーのこれまでの登り方、なぜ「ヒマラヤに」うんざりした」のかについて議論を展開することになる。実際には、メスナーはこのあと冬のマカルをめざしている(登頂できなかった)ので、発言の真意がどこにあるのかわかりにくい面はあるが、ヒマラヤへの気力が急速に衰えていることは、事実のようだ。

ヒマラヤ登山を実行するためにどんなふう金調達しているか、またすべきでないのかについても、熱心に意見が戦わされた。とりわけ、「どうやってスポンサーを口説くか」について。かねてメスナー的な登り方を「八千峰のコレクター」として批判していたクルティカは、「成果を売ること、成功というものに対するわれわれの態度が問題だ」と、クライマー自身の反省をうながす。八千峰をいくつ登ったか、を売りこめば確かに世間をわかった気にさせることはできるが、自分が実際に山で得たものをどう表現するかは、ずっと難しい、というわけである。

コマリヤリズムとの関係を指摘されて、メスナーが「君の名前や写真は雑誌の広告で何回も見ることがあるぞ」と、スコットにかみつくあたりも面白い。ベレタンたちが、「美しい資金作り」にいかにか心をくだいているかが、わかるのだ。

ヒマラヤの行きづまりと、それでも可能性を懸命に引き出すとする人間たちの努力を、この「サミット」は期せずして浮かび上がらせてくれた。互いに面と向かって批判をぶつけあい、自分をさらけ出しながらヒマラヤについて激論する男と女たちがいることに、私自身は少し感動した。

(江本嘉伸)

海外の山

- 応水 不明
- 4、山の呼ぶ声 藤木九三 昭和3年6月刊 文明書院
- 5、日本南アルプスと大井川 蘭 昭和3年11月刊 島田保勝会
- 6、日本アルプス大観 冠松次郎 昭和6年6月刊 木星社書院
- 7、ヒマラヤの旅 長谷川伝次郎 昭和7年8月刊 中央公論社
- 8、高山深谷―第九輯 高野鷹藏 昭和8年8月刊 梓書房
- 9、ナンダコット登攀 竹節作太 昭和12年8月刊 東京日日新聞社
- 10、山と闘ふ 朝日新聞社 昭和14年6月刊 朝日新聞社
- 11、氷雪に挑む 藤木九三 昭和14年12月刊 朝日新聞社
- 12、富士山 岡田紅陽 昭和15年10月刊 アルス
- 13、日本の山々 塚本閑治 昭和16年6月刊 東亜書林
- 14、高山深谷―第十輯 日本山岳会 昭和16年12月刊 日本山岳会
- 15、奥秩父 塚本閑治 昭和17年6月刊 山と溪谷社
- 16、チベットのフオスコ・マライニ 昭和17年7月刊 春鳥会
- 17、雲表を行く 冠松次郎 昭和17年12月刊 墨水書房
- 18、奥日光 塚本閑治 昭和18年5月刊 山と溪谷社
- 19、雪の上信越国境 塚本閑治 昭和18年8月刊 山と溪谷社
- 20、丹沢山塊 塚本閑治 昭和19年9月刊 山と溪谷社
- 21、日本の山々 塚本閑治 昭和25年8月刊 山と溪谷社
- 22、山岳写真傑作集 田淵行男 昭和26年6月刊 朝日新聞社
- 23、わが山旅 田淵行男 昭和27年8月刊 誠文堂新光社
- 24、エヴェレストへの闘い 朝日新聞社 昭和28年12月刊 朝日新聞社
- 25、マナスル写真集 毎日新聞社 昭和31年11月刊 毎日新聞社
- 26、山を行く 風見武秀 昭和32年2月刊 朋文堂
- 27、万年雪の王国 ガストン・レビュファ 昭和32年8月刊 平凡社
- 28、雪線 船越好文 昭和33年1月刊 白水社
- 29、尾根路 田淵行男 昭和33年6月刊 朋文堂
- 30、ジューガル・ヒマール 風見武秀 昭和34年7月刊 毎日新聞社
- 31、白い山 白川義員 昭和35年1月刊 朋文堂
- 32、山は静かなり 横田祐介 昭和35年3月刊 山と溪谷社
- 33、岩壁・稜線 多川精一 昭和35年5月刊 山と溪谷社
- 34、ネパールの山と人 風見武秀 昭和35年6月刊 山と溪谷社
- 35、尾瀬の山旅 白旗史朗 昭和38年8月刊 朋文堂
- 36、白峰・甲斐駒・仙丈 白旗史朗

海外の山

ポーランド山岳会歓迎富士登山
「曙の超特急」
山本良三

ポーランドの鉄人達は曙の富士山を駆け登った。最も速く頂上に達したのは三十八歳のヴィルチンスキー氏の二時間二十五分であった。

彼は一九八〇年五月、ダウラギリ主峰東壁をアルパイン・スタイルで登った剛の者で、現在選挙で選ばれたポーランド共和国スポーツ委員長の要職にあるという。ついで、カリフォルニア大学への留学経験をもつ二十一歳のレヴァンドフスキー君の三時間。会員ではカンチエンジュンガ遠征隊員であった大谷亮君の三時間弱であった。

登る前に「メスナーは一時間四十五分で登った」などと冗談を言ったのが競争心をあおつたらしい。冬期エベレスト初登頂者の小柄な三十六歳のヴィエリツキ氏は、その時から「われわれは二時間で登る」と宣言していたのだ。なにしろ、借り物の靴で、深夜充分な電燈もなく、ルートも不案内な上、かなりの強風の中、八合目からは硬雪の上を、浮身に近い格好とはいえ、二時間二十五分というタイムは並の人間ではない。

当企画は指導委員会(小林政志委員長)の主催によるもので、ポーランド側九名(うち二名は駐日大使館関係者)、われわれは小林委員長以下指導委員会を中心に会員有志を含め二十五名、総員三十四名であった。

五月二十四日(土)夕刻、河口湖畔のペンション「季節風」(会員浅田治男氏経営)に、小川山で岩登りをやっていたポーランド隊三名が中山茂樹君らの案内で姿を見せた。ヴィルチンスキーは一見して、物静かだが、屈強なアルプスの山岳ガイドの風格がある。二人の

学生のうち、ザチコフスキーはどこかヘルマン・ブルの写真に似ており、レヴァンドフスキーは女子学生と見間違ひそうな美形である。

夜も更ける頃、京都からザヴァダ隊長以下四名が鈴木郭之氏、神崎忠男氏らの案内で、新幹線で熱海から到着、相前後して東京から小林委員長、伊丹紹泰君らと共にポーランド大使館一等書記官ボジニアク氏と令嬢バーバラも姿を見せて、スバルライン入口で車に待機する会員以外全員が合流した。

予定通り深夜十二時三十分の出発を確認し、仮眠の時間もなく、マイクロバス二台、乗用車七台に分乗して富士五合目に向かう。五合目はかなりの強風であった。

電燈がたりないので先頭は集団を形成して歩く。銀銘水の分岐点で、「これから先、ルートは一本だ」と説明すると、ポーランド隊はたちまち闇の中へ姿を消して行った。その彼等の姿を再び見たのは、夜が明けて周囲が白みはじめた頃、九合目あたりの吉田大沢を駆け登る二人の姿であった。風は強く雨の気配もあるが、夜のとりどりが全てを覆いかくして、電燈の明りをたよりにまじめに歩くと汗ばんでくる。

ポーランド隊に余り遅れをとるのも気がひけたので、少し気を入れて登るが、先行の仲間になかなか追いつけない。夜もようやく白みはじめた頃、大谷君が追いついてきた。「仲間全員まだ下だ」という。いつの間にか先を歩いていたのである。彼等は夏路をとったらしい。大谷君に先に行ってもらい、ゆっくり登る。気温がさがったらしく、手足の指先の感覚が少しおかしい。特に足は軽登山靴のせいかもしれない。硬雪の一部が氷結

海外の山

山をきれいにゴミは持ち帰ろう

昭和39年7月刊 山と溪谷
社

37、ヒマラヤの高峰(別巻) 深

田久弥 昭和41年1月刊 雪華社
38、北ア展望 田淵行男 昭和41

年6月刊 朝日新聞社
39、白き聖地 山田圭一 昭和41

年7月刊 山田圭一
40、南アルプス 白旗史朗 昭和

45年8月刊 朝日新聞社



第七三回 三水会現地集會

石楠花の山旅・金峰山

(八六・六七・七八)

元氣甲斐のお弁当駅小淵沢で小海線乗車、窓に触る程近々と緑の枝を広げる落葉松林通過は圧巻であった。信濃川上で村営バスに乗り代え、徒歩出発点の金華山荘前に到着した時は十一時過ぎで空模様は灰色、然し皆の心は石楠花を期待して花色。沢沿いの林道を、穂の芽を摘みながら目を皿のようにして歩く。花は何処／＼と。途中からとうとう雨となり今年の開花は例年より遅いと落胆しながら辿り着いた小屋は、第二四回金峯

41、カラー南アルプス 白旗史朗
昭和46年7月刊 山と溪谷社
42、白き聖地・ヒマラヤ 山田圭

一 昭和57年3月刊 講談社
43、昭和写真全仕事 白旗史朗
昭和58年8月刊 朝日新聞社

出品者(敬称略・五十音順) 岩瀬
皓祐、小野幸、近藤信行、島田
翼、日本山岳会、山崎文庫

(岩瀬皓祐)

山開山祭前夜祭に集う人々で溢れ、私達は小屋主林さんの笑顔に迎えられた。

その夜の祝膳は、とびつきり新鮮な山海のご馳走。舌鼓を打ち、全員参加の酒宴はいやが上にも盛り上がり、歓談は夜更けまで続いた。戸外に出て見れば空には星が、また遠く清里辺りの里の灯が瞬き、明日の天気が保証されていた。秋山諏訪神社の神に大感謝。がんと聳える五丈岩が白雲と青

空の中に望まれた早朝だったが、二十分後その峰に立った時は再び雲に包まれ、祭祀の取り行なわれた間中、濃霧は晴れず、強風にさらされた私達は寒さに震えた。然し、頂上付近で遺松の間に花開く数個の黄花草石楠花と対面できて、その美しい姿にしばし心が和んだ。仰ぎ見る五丈岩に朝日夕日がさす時この山はその名の通り黄金の峯と輝くのであろう。

さて、照る日驚る陽の中を一路石楠花を求めて下れば大日岩まで

海外の山
しているが、寒くてアイゼンをつける気がしない。

この靴でも何とか行けそう。ポーランド隊は誰もアイゼンを持っていないではないか、などと思ったりしながらゆっくり登るが、下からは誰も姿を見せない。九合目あたりを登るポーランド隊の一人が見える。かなり弱っている様子だが、追いつく気もない。

時折り富士山特有の激しい突風が吹き抜けて行く。ガスが舞っているが視界は悪くない。雨の心配はもうないようだ。

頂上まで三十分ぐらいのとき、頂上にいたポーランド隊五名と大谷君が雪面を駆けおりてきた。「是より富士浅間神社境内」とある鳥居の処で待っている、先頭の二人が見る間に近づいてきた。

「ヴィルチンスキーは二時間二十五分、僕は三時間だ」と若いレヴァンドフスキーが誇らしげに報告してくれる。ヴィルチンスキーは黙って、透明なすずしい目をしていて。ついで本年秋季アンナプルナ南壁を狙うという陽気なヴィエリツキ氏。続いていつも「ナマステ」を連発するヒゲの男ダンサル氏。彼はバタゴニアの針峰フィッツ・ロイの初登攀者であり、昨年ローツェ南壁、今年

はダウラギリ南壁を狙っている。しんがりは副隊長格の感じがする重厚な三十五歳のチヒ氏、彼も冬期エベレスト初登頂者であるが、少々バテ気味。少しおくれて大谷君、かなりの荷を背負っている。「三時間弱で登った」という。油の乗りき

った会のホープの一人だろう。もう頂上には誰もいない。降りてもよかったが思い直して頂上に向かった。出でから四時間丁度であった。やたらに寒いが、ふるえながら水を飲み、冷めたいにぎりめしを食ったら、一層寒くなった。当日の測候所発表の気温は零下一八度とのことであった。下りはポーランド隊のようにアイゼンをつけずに硬い雪面を駆けおりるのが最も安全でかつ速い。だが

ポーランド隊のように速くは下れない。やはり諦めたか？ 途中、ジョキング・シューズ様の靴で登っていた二人連れの外人(あとでノルウェー人と分かった)を見かけたが、夏路を登っていて距離があったので声はかけなかった。

この頃から頂上部はガスに覆われることが多くなりはじめる。頂上まで一時間強のあたりに、永田秀樹君に伴なわれた五十七歳のザヴァダ隊長がいた。消耗の激しい顔であったが、「上は風はどうか」に、「It's not so strong」とまじめに答えてしまった。永田君の顔はザヴァダ隊長に降りてほ

しそうに見えたが、自分からは云い出しかねている風であった。続々と登ってくる会員、坂本、藤井、佐藤(千)、有元、原、川合らの各氏へ「もう降りよう」と呼びかけたが、ザヴァダ隊長が登高を中断しないかぎり登り続けるのだとの意欲を見せて、誰もつられて下山する者はなく、彼等は全員頂上まで行った。八合目付近では小林委員長が全員に眼を光らせて待機していた。「もうこれよりあとから登ってくる者はこれから降りてもらいましよう」と。植村直己物語の英訳の仕事をして

いるハロルド・ソロモンさんが殿であった。そのほかの会員達は連日のポーランド隊の世話疲れで、とても頂上まではつき合いかねるが、との覚悟で顔を見せておられた方々であった。「ご参加いただき、有難うございました」と指導委員会からのお礼の言葉で現地散会した。

参加者(ポーランド側) アンジェイ・ザヴァダ、レシエック・チヒ、ルドヴィク・ヴィルチンスキー、クシストフ・ヴィエリツキ、ミロスワフ・ダンサル、トマシ・レヴァンドフスキー、ヤーツェク・ザチコフスキー、マリウシユ・ボジニアツク、バーバラ・ボジニアツク。(日本側) 鈴木郭之、神崎忠男、神崎ゆう(同上娘さん)、米国女性(同上の友人)、伊丹紹泰、小林政志、大谷亮、石橋正美、坂本正智、藤井正彦、神山良雄、村木富

海外の山

来た所でやっと咲き始めた数株を見つけた。一同大歓声。待望の写真がとれたのだが、花に恋い余って登り来て、何と豊富な石楠花の葉を見る山旅となってしまうわけである。しかし、当初の目的は外れたが開山祭の諸事に巡り合い大変有意義な山行だった。

瑞穂山荘より増富までマイクローバスで下り、一同、温泉でさっぱりした後、満員のバスで雄略駅へ到着し、全員無事に今回の山旅を終了することが出来た。豪快な山容の八ヶ岳も、そんなわれわれを見送ってくれていた。

参加者 高田真哉、広羽清、二宮澄明、滑志田隆、松井美恵子他三名 (松井美恵子)

会 員 通 信

七月四日 カシニガルにて
織内 信彦

登山隊につきものの慌ただしさの中から、出発以来、一〇日目に中央アジアの中心カシニガルに到着、別送したスバル・レオネ4WDでタクラマカンの周辺を疾走、四日かかってウルムチから辿りついたところだ。覚悟はしていたものの物凄い暑さ、連日、四二、三度を越します。ここはシブトンとティルマンがギャルツェンをチベットから呼び寄せてムスターグ・アタを試登して失敗した故

地。また明治三十九年に日野 強が単身カラコルム・パスを越してラダックのレーへ行つたときの基地でもあり、興味津々たるものを感じます。

広島在住会員

懇 親 会

昭和六十一年五月三十一日(土)十八時二十時三十分、広島市内の「もみじ会館」において、広島在住者の初の集会が開かれた。

かねてより、古い会員を中心に、在広の会員の親睦交流と情報交換を図ってほしいとの要望が数多くあった。

本年五月初め、泉尾、伊藤両会員から、今月中に何とか初会合ができないかとの発案があり、急提、開催通知をすることとなった。JACの会員名簿をもとに二十四名の在広者に懇親会の案内をするも、急なためか、約半数の方の出席回答をいただくにとどまった。

ちょうど、当日はインターハイ(県総体)や他の行事が多数あり、どうしても練りあわせることが出来ないで、皆さんよろしくとのお手紙も多数いただいた。平田会員には、ちょうど中国の章子峰(チャンツェン)から帰広したその足で参じてもらった。

結局、九名の会員によるファミリーな親睦会となった。泉尾、伊

海外の山士、佐藤千恵子、佐藤智子、武居台三、永田秀樹、薬科光雄、原謙二、川合周、ハロルド・ソロモン、有元利通、山本良三。

日米交換登山アメリカの

報告書から(中)

海外委員 中村 テル

城ヶ崎では予定より早かったので予約のホテルに泊れず、小さなコテージに入った。アメリカ人にとって一室に五、六人入るのは窮屈と感じたが、同じ広さの他の室には十三人の日本人がいるのを見つけた。トルコ式の大鍋にコナ・ハワイアン・コーヒーを煮立て、スーパわんで飲んだので、すっかり疲れはとれ、一同大喜びであった。城ヶ崎は想像以上に美しい。青い海と白い波、水平、またはオーバーハングの黒い玄武岩はよく乾いている。空は蒼く、そして、ふんわりとした雲が流れている。海はエメラルド色で、太平洋の彼方、水平線に漁舟が走っていて、木の幹や枝は盆栽のように曲がっている。七〇度くらいの温度で、そよ風が吹き、ショートとライクラが丁度よい服装であった。われわれは、登って、登って、登りつづけた。それ程までにすばらしかった。われわれはフェイスルート、クラックルート、オーバーハング等ものすごく美しく、すっきり魅せられてしまった。われわれは隊員同志を避けて、相互の文化交流のため主に日本人と登った。地上でリーダーをビレーする日本側のテクニクは可成りおそまつであるのに気が付いた。彼等は壁から約二〇フィートはなれた岩に座り、ザイルはステッチプレートを通すか、または数字の8にしている。若しもリーダーが七五*の外人であり、墜落すれば、彼等は空中に二〇フィートばされてしまうから、アメリカ人と登る時はアンカーにザイルをしぼりつけなければならないことなどを、知る必

要がある。

男性ですら日本人のウェストは私の太ももと余り変らない、私の手のひっかりは彼等の拳のひっかりであり、私の拳のひっかりは彼等には広すぎる。これは、勿論、時には便利であり、かつまた、不便でもある。結局は同じことになる。そして日本の等級づけは基本的にアメリカのと同じである。ヨセミテのデシマルシステムが一般に使われている。日本人の倫理は、厳格であるが、絶対に純粋ではない。ラペルザイルで下降の時の危険防止のボルトが打ってある二、三のルートがあるが、既設の危険防止や、調査や、清掃や予備練習などをせずにルートを先達する方法が強調されている。これは可成り新しい登攀でも、クラックは時にはよれていて、ブッシュが生えていたりするが、整理されている所を登りなれた連中にとっては少しばかり不安定を感じさせた。われわれは「デモンストレーション」登攀をさせられた。五人のアメリカ人が同時に五つのルートを各自の能力に応じて登らせられた。約三十人から四十人の日本山岳会の現役登山者が下から見守ったり、写真を撮ったりした。登るのに、われわれには特別なプレッシャーはかからなかったが、しかし、みんなの神経は、この旅で大分疲れたと見えて、五人のうち三人が煙草を吸い始めた。誰もが瘦せた。特にリーダーであった私にとっては去年パキスタンに混成隊で登山とカヤクに出かけた命がけの危険な旅よりも、本質的に全く疲れきった旅であった。

東京に向かった時に正に本場のストレスと緊張が始まった。そこでは日本人のプロトコールと儀式がわれわれを可酷に験すこととなった。われわれはきちんと衣服を整えることはわきままえていた。ビジネス用の名刺と贈物を用意し、二、三の日本語をおぼえて、人々の名前を記憶した、がわれわれはみんな、若いし、元来クライマーで、現海外の山

藤発起人の挨拶の後、会員の自己紹介が続く、ビールと酒がすすむに従い、入会時のことや昔の登山に花が咲き、懇談は最高に盛り上がる。

組織の充実や今後の活動の方向、次回の交流会それに広島支部設立の話題にまで発展し、話は尽きるところがない。二時間にわたる歓談の後、一応十月の再会を約束する。

山岳博物館を考える会から

日本山岳会創立八十周年記念展覧会に当っては会報40号(60年10月)に報告の通り、各界から数々の貴重な山岳資料の提供を頂き、お蔭で成功裡に終了したことを一同喜んでおります。

その後、会報40号(61年4月)にも記したように「山岳博物館を考える会」では総務とも連絡を取りつつ、これら資料のリストを作り、今後の資料蒐集や保管方法等について協議を進めて参りました。一方、当会ルームは愈々手狭となり、資料の保管も限度に達している有様なので、差当り右のような方法をとることになりました。ここに「ご報告」を各会員各位にも何分のご協力をお願い申し上げます。

これまで日本山岳会に属する山岳資料の一部が寄託されていた松本市立アルプス山岳館、大町市立

し、泉尾先輩の音頭による乾杯で閉会となった。

第一回の会合であったが、今後この会がますますの充実を図ってまいりたいので、各位のご協力とご指導をお願いしたい。

参加者 泉尾忠志、本片山数雄、平位剛、伊藤祐道、平田恒雄、篠崎仁、高見和成、井上信義、上中俊治 (上中俊治)

山岳博物館、並びに日本体育・学校センター付属秩父宮記念スポーツ博物館の三館にも引き続き資料の寄託を受けて頂くと共に、アルプス山岳館と、大町山岳博物館には新たに、日本山岳会の希望する資料を寄託の形で更に受入れて頂き、必要な際には随時日本山岳会に返還して頂く旨の公的文書の交換を致しました。

この機会に和合正治松本市長、高橋恭男大町市長、望月哲太郎日本体育・学校センター理事長はじめ関係の方々のご好意ご協力に對し心から御礼申し上げる次第です。

リストに関しては、上記寄託資料も含めて新たに完全なものを作成中で、既に此のたびルームに配備されたコンピュータにもその一部は入力され、何時でも保管場所別、品目別、あるいは寄贈者別

海外の山 役のクライマーであり、日本の登山家の有名な先輩達にスピーチをし、或る人々はわれわれよりも三十年も経験をつんでいる日本山岳会々員に会う……ことを念頭に入れていた。

われわれは最善を尽した。正式な歓迎会が日本山岳会主催で催され、われわれはアメリカ山岳会ジャナル、ヨセミテのカレンダー、アメリカ山岳会のバッジなどを贈り、此の日のために取っておいた、隊員マークのジャックダニエルのびんをあけた。忽ち二十個の氷と二十杯の小さなグラスの美味に化け、またたく間に全部空になってしまった。アメリカ大使館の外交官や日本滞在のポランド登山審議会々員に会った。彼は交換登山の計画を打ち合せ中である。われわれは第一回であるが、たしかに他の連中が続くと思う。会の司会は鈴木邦之で国際グラフィック会社社長でこの訪問が成功するよう努力した人でもある。われわれは日本山岳会の二名の副会長と前会長の佐々博士にも会った。坂下直枝はアメリカ山岳会々員であり、日本山岳会への私の申込書を喜んで翻訳してくれた。

この歓迎会のあと西武と言う巨大で、一区画を占めている百貨店でわれわれだけの催しをし、そこでスライドを見た。ロージは女性ロッククライミングを、私はキツチャタネ絶頂の古いスライドを見せ、直枝が両方とも通訳してくれた。彼の通訳でも、外人の観客と慣れないプロジェクトでうまく行かなかった。日本のスライドショーはすくなくとも十年はおくれている、彼等のTシャツのグラフィック法は初歩的であることを発見した。日本のタオルは可成り貧弱な技術製品である。君は小さな手ふきを持つ、そしてそれが君自身

身のタオルで、それで洗ったり、ふいたり、そしていつまでもそれは君専用で、旅行の終りにはそれをすてるのである。さらに、東京には一軒しかコインランドリーがないんぢやなろうか、何故なら各自が自分で洗濯をするから。私は隊員達の汚れた靴下や、Tシャツなどを持って、三哩先のコインランドリーまでタクシーで往復しなければならなかった。日本に来る旅行者は本物のタオルを持参し、靴下やTシャツはその期間、間に合うだけ充分に用意すべきである。東京のあとは、各自違った方面に出かけた。ジョンは素晴らしい寺院を見に京都に、そのあと、国際水産会議のため来日していたステーブ・デビスと二人で富士登山にかけた。二人は丁度日の出頃頂上に到着し日本人にとってそれが全く宗教的なものであると言った教養を身につけた。

マークとロージは日本の男性ロッククライマーの池田功とフェイスクライム地域に出掛けた。われわれは有名な女性クライマー、室井由美子と山川真美達にも会ったが、信じられない程小柄であり、登攀法やスタイルも優雅であった。

グレンと私は小川山に戻った。少し肌寒く木の葉は落ち始めて、夜は寒かった。他の連中にはストレスが少なかつたかも知れないが、千三万人の人口の故か東京ではわれわれは可成り疲れ切ってしまった。私はアメリカ山岳会副会長の故か、山岳会で私と等しい立場の人に紹介された。その人達は礼儀とか教養の点で遙かに優れており、年齢も三十歳くらい上であった。登山の世界で想像以上の優位さを保てるのは役員が若くてまだ登山者として現役であることである。

(次号へ続く)

等の打出しも可能な状態となっております。この機会に別表1には八十周年展以後、会員各位から本会

に「ご寄贈頂きました資料のリスト」を掲げ御礼と報告に替えて頂くたく思います。

今後アルプス山岳館や大町山岳博物館とも協議の上、新しい保管場所を全品目について決めると共

表1 日本山岳会受入資料報告

仮番	品名	ヶ数	仕様・使用者等	受入年月日	(敬称略) 寄贈者名
251	門田ビッケル (扇型)	1本	上田哲農氏旧蔵	S60. 8.31	上田しのぶ
185	ウェストン有明登山のスケッチ 複写写真	1式	額入 4葉 石田吟松筆	S60.10. 1	高山忠四朗
272	会員欧州通信他	1式	高野鷹蔵氏旧蔵	S60.10. 1	高野 岳雄
272	門田1号ビッケル	1本	無 銘	S60.10. 1	和久田弘一
246	プリマービッケル	1本		S60.10. 1	中川喜久雄
310	美津濃アイゼン (ケース付)	1足		S60.10. 1	中川喜久雄
199	空撮エベレスト (カラー)	1枚	半切額入, 山田氏撮影	S60.12. 1	山田 圭一
245	シェンクビッケル	1本	板倉勝宣並びに横有恒氏旧蔵 (シャフト戦後)	S60.12. 1	板倉 勝正
252	ビッケル	1本	戦後特製	S60.12. 1	芳野 赴夫
403	JAC30周年記念品 (インク壺)	1ヶ	高野鷹蔵氏旧蔵	S60.12. 1	高野 岳雄
257	山内ビッケル #571	1本	小谷部全助氏旧蔵 (シャフトは 戦後)	S61. 3.17	望月 達夫
325	シュラフ	1ヶ	藤島敏男氏旧蔵	S61. 3.17	望月 達夫
324	登山靴	1足	"	"	望月 達夫
333	登山靴	1足	"	"	望月 達夫
332	ルックザック (キスリング)	1ヶ	"	"	望月 達夫
334	ルックザック (絆付)	1ヶ	"	"	望月 達夫
327	登山靴	1足	双 葉 製	"	望月 達夫
326	ボンチョ	1枚	米軍放出	"	望月 達夫
331	ルックザック (キスリング)	1ヶ	片桐 (背負皮は佐藤氏製)	"	望月 達夫
335	ルックザック (絆付)	1ヶ	ベルガンズ製	"	望月 達夫

に、備品番号や資料説明の一定様式による添付、記念となる石などについては飾台やプレート等の作成、ビッケル・アイゼンの防錆処理、輸送梱包など順次行なっていく予定です。

これを機会に山岳資料となり得る貴重な品の数々をお持ちの会員や、そのような資料についての情報をお持合せの会員各位には、精そそれら資料や情報を、日本山岳博物館の設立に関心をお持ちの会

会事務室気付「山岳博物館を考える会」宛ご提供下さいますようお願い致します。(ただしご提供頂きました資料を凡て陳列したり、永久に保存したりできない場合もありますので、その点予めご諒承をお願い致します。)

また今後資料の整理や蒐集・発掘には益々人手も必要と考えられます。日本における理想的な山岳博物館の設立に関心をお持ちの会

福島支部レポート

(五月十日、六十一年度総会)

報告

(中村純二)

支部発足以来初めて現地「山」での総会が二岐温泉「あすなる荘」で行なわれた。中嶋支部長より本部及び支部長会の報告のあと議題に入った。メイン・テーマは六十一年度の行事計画、二年後の支部結成四十周年記念行事について慎重審議され、予定時間オーバーして七時半終了。続いて奥の広間に会場を移し懇親会に入った。

二の膳のご馳走のほか、宿のあるじ利左衛門さん手づくりの、タラノ芽の天ぷら、コゴミのゴマ和え、と料理がサービスされ、まろやかな地酒に酔いもハイスピード、話題がもつばら飯豊山麓、珍味な「宮古」のソバを食う会に集中。地元五十嵐昭市さんの提案で十月末、昨年に引続いて開催することに決った。但し、参加者は必ずカアチャン同伴との条件がつけられるな

ど話もはずみ、和気あいあい、宴が盛り上った。

△翌十一日は二岐山登山▽

支部員のみでのんびり登山する積りだったが、地元主催の山開きと重なり、中嶋支部長は県山岳連盟会長として挨拶するはめとなり、開山式に花をそえた。神官のオハラとオミキをいただき参加者百五十名の登山が開始された。十一時半、山頂着。せまい山頂は、「ミス二岐」を期待する人で一杯、支部バティは女岳と男岳の鞍部まで先行してようやく昼食。大部隊に追いつかれないように男岳の急斜面を駆け下り林道に出た。この林道は十数年前、二岐山腹のブナ原生林の伐採用につくられたもので、当時、地元自然保護団体の反対運動の成果で中止されたが、最近またその動きがあるとか、地元では先日上京し、林野



庁に反対陳情して来たとのこと。どうかこのままの自然林を保持してもらいたいものである。あすなる山荘に戻って露天風呂で汗を流し、四時半解散した。マイカーに分乗するのを待ってたかのように雨が降り出し、新緑が一層さえ、タムシバの花に見送られて帰路についた。

参加者 中嶋正夫、渡辺千代蔵、国分恒司郎、相模八郎、室次雄、室光子、遠藤明男、八巻和男、清和良晴、広瀬由昌、笹川慶子、伊藤義男、五十嵐昭市、古市義孝 (古市義孝)

熊本支部年次総会と 高岳山行

熊本支部の昭和六十一年度総会は、さる五月二十五日(日)八時から、阿蘇高岳の麓にある阿蘇簡易保険保養センターで行なわれた。

総会は、まず西沢支部長を議長に選んで議事に入り、昨年度の事業報告、収支決算、並びに今年度の事業計画の説明があり、いずれも拍手をもって承認された。また、来年度に予定されている支部結成三十周年記念行事については、次期委員会が具体的な内容を更に検討することになった。総会終了後、マイカーを連ねて阿蘇の盟主、高岳の北麓にある仙酔峽へ。

ちょうどミヤマキリシマの満開時とあって、あたり一面ピンクに染まる見事な眺め。観光客で賑う仙酔峽をあとに、荒涼とした堅い溶岩塊の急斜面をひたすら登り、十二時、俗に肥後国で知られる標高一五九二メートルの高岳頂上に到着。眼下には、すっかり田植えの終わった阿蘇谷の水田が白く輝き、外輪山の彼方には九重連山がかすかに望まれる。時折、谷間から吹きあがる風によってカッコーの音がこだまする。帰途は稜線伝いに中岳を経由し、十四時、雑沓の仙酔峽に下山。

参加者 西沢健一、馬場猛、馬場千代子、石井久夫、本田誠也、多田隆峰、田上敏行、和仁古昇、大木野徳敏、大木野マツ子、松本莞爾、菊池更生、門脇愛子、樋口格、樋口洋子、川端浩文、河上洋子、中村誓紀、中村夫人、鶴田佐知子 (田上敏行)

北海道支部総会

北海道支部総会は、六月七日札幌駅前雪印パーラーで開かれ、昭和六十年度事業報告、収支決算、昭和六十一年度事業計画、収支予算案。支部規約一部改正が承認され、支部役員を左記の通り選任した。

このあと懇親会は、春の転動で札幌に戻った小野会員の音頭で乾盃。各自、山行や近況を語り、山形の月山シンポジウム土産の御蔵

酒月山を酌み交わし、事務局は、追加注文に走ることに二回、締め括りは、元気な自称高齢者、金井会員の乾盃で次なる『鶴』へと移動。

リラの花盛りの大通りを、横切ると二次会場には、十四、五人程集り気炎を上げている。例によりY会員宅への泊り込みは四人、夜半帰宅二人という結果であった。

◎支部役員

支部長 橋本誠二、副支部長 芳賀孝郎、小林年、野田四郎、支部委員・自然保護 辻井達一、会報石井忠雅、久保田優一、集会 柳田涼子、亀井秀子、澤田良子、記念 高澤光雄、浅利欣吉、新妻徹、地域 河村章人、事務局 平野明、三浦勝幸、監事 井後幸太郎、木下恵子

◎六十一年度事業予定
七月五・六日夕張岳山行
『高山植物を訪ねて』
七月十日・八月二十日
知床現地セミナー 羅臼町

九月二十・二十一日
観月会 大沼公園付近
十二月十三日 忘年会 場所未定
三月七・八日 スキー合宿 未定

出席者 森下雅幸、高澤光雄、山川力、柳田涼子、佐々木喜一、三浦勝幸、高松秀彦、菅原修三、小野肇、横田春雄、沼崎勝洋、金井五郎、大野秀樹、河村章人、河村皆子、澤田良子、橋本誠二、平野明、浅利欣吉、酒巻吟一、大久保

五郎、水科行雄、石崎貞子、井後幸太郎、石井忠雅、川越皓充

信濃支部創立

四十周年記念祝賀会

本年は当支部創立四十周年にあたる。その祝賀会が第四十回ウエストン祭前夜祭と兼ねて、昭和六十一年五月三十一日の夜「ウ」祭実行委員会本部のおかれた、上高地西糸屋山荘で行なわれた。

会場には来賓をはじめ、「ウ」祭記念山行で徳本峠を越えて上高地にはいった支部会員、上高地で一日中設営を担当した支部会員等支部関係、六十二名が参集した。

来賓には、本会が招待した遠来の客、ポーランドの登山家アンジェイ・ザヴァダ氏以下七名の方々はじめ、今西寿雄会長、佐々保雄前会長、高山忠四朗名誉会員、鳴原啓佑、岡沢祐吉、鈴木邦之、関塚貞亨各理事、松田雄一評議員、奥原敦永前支部長らが出席された。

蒲生支部長が恒初代支部長から現在に至るまでの信濃支部の歴史を語った後、来賓を代表して今西会長より次の祝辞をいただいた。

信濃支部は、日本でも有数の山城をもち、四千人会員が一番お世話になっている地域のひとつである。その支部が四十周年を迎えたというところで同慶の至り。この間、ウエストン祭をこのような盛

(平野 明)

月三十一日午前六時。蒲生支部長の挨拶の後、記念山行に移った。今年も安曇村の小学生が参加してくれた。

二又までは車道を歩いて行く。昨夜来の雨も上がり、新緑がいっそう鮮やかである。二又を過ぎると、今までの車道に代り登山道となる。島々谷の沢沿いに右岸、左岸と移りながらならだかに登って行く。ヤマシヤクヤクの白い花も所々にみられる。

昼前、昔ながらの岩魚止め小屋へ着く。大きな桂の木が日陰を作ってくれていた。登るに従い沢の水量も減り細くなっていく。左岸へ渡ると最後の登りである。桂もこのあたりでは芽を吹いたばかりである。ジグザグの登りを一時間ほどで峠に着いた。小屋の周りには残雪が多い。西穂、前穂、明神岳が美しい。大勢の登山者が、ほっとしたように休んでいる。休憩の後、例年よりも多い残雪の中を上高地へ下った。

昭和六十一年六月一日曜日、恒例のウエストン祭がミズナラの芽吹きのみせかえる上高地で行なわれた。今年は回を重ねて四十回にあたる。前日の徳本峠越えの記念山行と共に、以下その印象記である。

第四十回ウエストン祭

信濃支部

△記念山行△

徳本峠入口、島々谷入口には五百人ほどの登山者が集まった。五

定刻、午前十時には、碑前の広場に丸く大きな参会者の輪ができ、歌

えよたかく。エーデルワイスクラブのさわやかなコーラスの流れの中で開会。今年は長いこと皆勤なさった指揮者の平野修先生が、ヨーロッパにご出向の由で姿の見えないのが寂しい。地元安曇村の小学生と全日本花いっぱい連盟の子どもの献花で、会場はクライマックスに。そして「エ」クラブの「ウェストン祭の歌」の献歌。

今年は特別参加のボーランド隊に、アルプス少年少女合唱隊がボーランド民謡「カッコーの歌」で歓迎すると、ボ隊よりは「森へ行きましよう娘さん」のお返しがあつていい雰囲気であつた。

会のはじめには「雪山讃歌」おわりには「今日の日はさようなら」の全員合唱をとり入れて四十五分間、歌によって進行した楽しい集いであつた。

そのあとは記念講演会。はじめに支部会員小林俊樹氏が「ウェストンリーフの秘話」。

続いて前会長佐々保雄氏が「日本山岳会事始め」。

(一志幸夫)

白地山々行報告

秋田支部

本年度第一回目の当支部山行は、去る六月二十二日、十和田湖外輪に佇む白地山(標高一〇三四m)において実施された。

白地山への登路は大川谷口を始

め数ヶ所あるが、今回は最も気楽に登れるコースとして鉛山峠口を選んでみた。

かつては、鉛山峠までのアプローチが長く、また鉛山峠口の急坂などで利用者が少なかったが、果の年次計画で整備されている「大館・十和田湖樹海ライン」が一部完成し、これによって鉛山峠直下までの車の乗り入れが可能となり、山頂までの標高差わずかに二百m程という大変気楽に登れるコースに変貌した。

この車道は、本年度中に発荷峠と結ばれ、六三年までには全線開通の予定である。今後、山岳観光道路として大いに利用されることであろう。

午前五時、秋田市の岡田支部長宅を車で出発し、小坂町で地元の栗山先生と石田会員に迎えられ、岡氏の案内で一路鉛山峠の登山口へと向かう。

午前九時、登り始めと同時に当支部ジnkスの雨となり、この先思いやられたが、鉛山峠に到着した頃晴れ上がり、足下に広がる十和田湖が幻想的に浮き上がる様に一同歓声を上げる。

ダケカンバの茂る外輪の尾根筋の道は平坦で登降がなく、辿ると見晴しの良い白雲亭跡地に出、更にブナの樹海を眺めながら進むと大川谷への分岐・ミソナゲに至る。途中の熊笹帯はタケノコ採りで賑わっていたが、それを尻目に

どんどん進む。

十和田の山々を説明する栗山先生の地理的研究はさすがなもの、知らず知らずのうちに九九七七地点に到着。正午も過ぎており、見晴しの良いこの地点で採りたてのタケノコ汁で昼食をとる。

ここから先は登坂のない笹と灌木帯の幅広い高原状となり、辿ると間も無く広い白地高原に飛び出す。(長引分岐あり)更にこの先にある湿原で碇ヶ関への分岐と分か、一等三角点のある山頂に午後一時に到着。今日一番の高齢者・柳谷会員は一足先に既に山頂を踏んでいた。

眺望を楽しみ、写真撮影の後、下山開始。もときた道を引返し、タケノコに誘惑されながら午後四時少し過ぎ車道に到着、無事山行を終る。

参加者 岡田光行、柳谷正義、佐藤兼治、石田明、北林嘉鶴子、福田光子、今野昌雄、伊藤康二、佐々木民秀、(会員外) 栗山小八郎、佐々木智秀 (佐々木民秀)

日本登山医学

シンポジウム開催さる

五月三十一日、六月一日の二日間、第六回日本登山医学シンポジウムが、医療委員会メンバーである長尾徳夫教授のお世話で、聖マリアンナ医科大学病院で開催された。特別講演は、鹿屋体育大学助

教授・大平充宜先生による「低酸素が細胞の代謝に及ぼす影響」で、細胞レベルでの馴化の仕組みをわかりやすく解説してくれた。

一般演題は二十で、高所障害、高山所における生理学的事項が話題の中心であった。

この会は、登山における医学的問題に興味のある人達が集まって討論する、わが国唯一のものである。今回は、七十二名の参加者があり、活発な討論がなされ大変有意義で盛会であった。懇親会の席上でもきどらない意見の交換がなされた。

なお次回回は、京都で斉藤淳生先生のお世話で、同時期に開催される予定である。登山医学に興味のある人は、是非参加して下さい。(医療委員会・浜口欣一)

婦人懇談会主催セミナー

三月十八日、十八時三十分よりJACルームにおいて、松永敏郎氏、柳沢昭夫氏を講師として「トレーニング……よりよい山登りをするために」というテーマでセミナーを行いました。

身体各機能の中で、特に登山における働きと、それらを強化するためのトレーニング方法を講師の方々の経験などをまじえて、わかりやすくお話しして頂き、また、出席の方々の体験談も加わって、内容の濃いセミナーになりました。

した。

出席者・順不同 梅野(淑)、織田沢(美)、齊藤かつら、鈴木嶋夫、豊田三千代、渡辺晴美、楠田トシ子、矢作有子、出口當、柴田初子、熊谷とも子、芳賀真矢子、武川恵美、高橋寿美江、早川瑠璃子、小原晴子、白子広兵衛、前西秀、佐久川京子、本郷三好、石川政雄、酒井俊一、大塚玲子、島田靖、山口節子、高澤英雄、平井拓雄、上北和夫、渡辺雄二、重廣恒夫、菅野キヨノ、松沢君子、中川武、細井澄子、広羽清、藤田礼子、渡辺富士子、松田雄一、佐藤知恵子 (佐藤知恵子)

会務報告

六月理事会

6月11日午後6時30分

場所 本会ルーム

出席者 今西会長、山田、大塚副会長、嶋原、橋本、松永、梅野、高遠、鈴木、新井、大森、岡沢、長谷川、絹川、関塚各理事、山本監事、松田評議員
委任 大橋、太田各理事、宮下評議員
審議事項

◎一九八七年シャハーン・ドック峰登山推薦状交付について 了承
報告事項
◎第四十回ウェストン祭について
◎ボーランド登山隊来日の件、五月二十一日来日、六月五日帰国、

短期間で活躍、世話人、関係支部の方々にはご苦労をかけた。

◎三国合同登山(チョモランマ)について

◎委員会報告

ルーム日誌

六月

3日(火) 三ヶ国登山懇談会
5日(木) 学生部遭難対策講習会
8日(日) 三ヶ国登山懇談会
11日(水) 理事会
12日(木) 図書委
17日(火) 婦人懇談会
20日(金) 会報編集委員会
24日(火) 自然保護委員会、婦人懇談会
26日(木) 科学研究委
27日(金) 青年懇談会
30日(月) 総務委員会、山岳博物館を考える会
今月の来室者362名

会員移動

名前変更

9172 小野寺優子↓香枝
1659 大阪大学体育会山岳部
↓大阪大学山岳会

8808 若林 幸子↓本多へ
支部変更

7675 桐生 恒治(越後へ)
5821 橋村 一豊(東海へ)
1936 三ッ石 清(東海へ)

夫婦会員

9873 石村日満子(石村実夫
人)

9884 南里 晋亮
8808 本多 幸子(本多博夫
人)

終身会員へ

2525 中尾 正武
5528 中里 巖
6187 林 雅浩

物故

1069 今井 嘉道(6・11)
4848 木本 善重(6・5)
9685 杉山 正樹(6・届)
3721 平沢亀一郎(6・27)

退会

4388 小沢 重男
5949 大佐々哲夫
7197 門田 茂
7767 永野 均
9548 諸橋 勇雄



☎ 234-6659

この電話で
お知らせ
しています

◎JAC夏の恒例・ビアパーティ

日時 九月六日(土) 十八時半より

場所 日本山岳会 集会室
会費 二、〇〇〇円

飲み放題、食べ放題!!

主催・婦人懇談会

◎会員懇談会

今回は大変珍しい登山に関する報告会をスライドを交えて行ないます。

会員諸兄姉の多数ご参加をお待ちしております。

日時 九月十六日(火)

午後六時より

場所 本会集会室

(一) ロライマ山南西壁新ルート
初登はん

講師 上村信太郎

(二) エンジェル・フォール新ルート初登はん(一〇〇〇メートルの世界最長の滝)

講師 小林 春好

◎虎毛山々行予告

秋田支部

当支部の秋山々行は、寅年にちなんで、秋田県雄勝町に鎮座する虎毛山(一、四三二m)に決定しました。期日は十月十一、十二日ですが、干支の山に興味ある方の参加も募ります。一泊二日、合わせて懇親会も実施致します。

参加希望者は当支部に連絡下さい。実施要項をお届けします。

(〒010)秋田市山王六ノ十一ノ五

渡部ビル2F 佐藤兼治方
日本山岳会 秋田支部

◎山岳図書交換会開催

交換会開催

読書の秋の恒例の山岳図書交換会を本年も左記の通り開催いたしますので、奮ってご参加の程お願い申し上げます。

記

期日 昭和六十一年十月二十五日(土)

場所 本会ルーム

開場 午後二時

なお、本交換会の趣旨は、会員各位の読み終った本、あるいは不用本を、お互い持ち寄って、欲しい本と交換しようというものです。交換出品ご希望の方は、希望価格を添えて、九月末日迄に、図

書委員会までお送り下さいますようお願い申し上げます。

図書委員会

◎近代絵画にみる日本の山・名作展

主催 日本山岳会 朝日新聞社

国土の大半を山地が占めるのが国では、山は人々に身近なものと親しまれ愛されてきました。幾多の画家たちも山に魅せられ、数々の作品を残してきました。本展は、日本山岳会創立八十周年を記念して、日本の山を描いた近代の日本画、洋画の名作を一堂に展覧し、明治から現代に至る絵画の歩みをたどるとともに、日本の近代絵画史におけるモチーフとしての山の意味を探るものです。

出品作家には、日本画から横山大観、村上華岳、東山魁夷、平山郁夫など三十数作家、洋画から坂本繁二郎、梅原龍三郎、田崎広助、向井潤吉など三十数作家、各作家一点ずつ合計七十余点で構成。

会期・会場

▽8月28日(木)ー9月9日(火) 東京・上野・松坂屋

▽9月18日(木)ー23日(火) 大阪・松坂屋

▽10月21日(火)ー11月3日(月) 愛知県文化会館美術館

会告

(会費納入方法と会員証について)

昭和六十一年度より、会員管理コンピュータ化に伴い、会費納入方法を次のようにしますので、会員各位のご協力をお願い致します。

本会より発行する会員氏名・住所が印字され、納入金額が記入された請求書と振替用紙(四連)が各位に送られますので、その振替用紙を用いて最寄りの郵便局または銀行より送金願います。原則として現金での納入は受け付けないことになります。

従来、支部経由で納付されていた方も、今後は本会から送られた振替用紙を使用の上、直接本会宛に送金願います。

会費領収書は、振替の領収書を受領書としますので、別に発行いたしません。会員証については別途発行することを検討しています。

理事会

北アルプス燕山荘物語

山の天辺

赤沼千尋著

◆アルピニストの草分け 燕山荘創設者赤沼千尋が山の四季と山岳史に残る数々のエピソードを綴る

定価1,800円

用美社



東京都中野区上高田一―一二〇
電話〇三―三六七―二二八八

◎新しい山日記完成

山日記第五十一集ができました。新しく手帳サイズになり、定価八五〇円、会員頒価六〇〇円です。山日記編集委員会

昭和六十一年八月二十日発行

102 東京都千代田区四番町五一―四

サンビュウハイツ四番町

法人 日本山岳会

発行者 今 西 寿 雄

編集代表 岡 沢 祐 吉

電話東京(20) 四四三三

振替口座 東京三―四八二九番

東京都港区六本木三―一三〇

印刷所 株式会社 技報堂